

ミニ・シリーズ:農に関わる営みと暮らし ～日本における様々な動き～

最終回: 消費者へ向けた発信、合鴨水稲同時作、そして山田の中から息吹を…

神奈川県横浜市青葉区の田園都市線沿いに、オーガニック製品をそろえるモール(商店街)「プランツ」がある。衣・食・住にわたってオーガニック製品の紹介と販売及びそのライフスタイルを提案するレストラン・バーやショップ、建材ショールームが集まるモールであり、定期イベントやギャラリーも催される。オーガニック商品に関心をもつ消費者に向けた、または関心をもたせるための発信の形としてのひとつであるが、オーナーは衣・食・住におけるオーガニックな暮らしに興味を持ち、それに関連する商品を世のために広めたいと考えている。同時に、有機野菜農家と提携をし、それらの野菜を他のデパートやレストランにも卸している。有機だからといって泥っぽいわけではなく、清潔感があふれ落ち着いたお洒落な雰囲気、店外には植物や鉢などの園芸商品が、店内には有機野菜、加工食品、服飾衣料、生活小物、雑貨、台所用品、書籍など吟味された商品が陳列されている。人気商品は品切れご免になることが多く、隣のレストランでは、有機野菜中心のメニューが揃い、訪れた土曜日は着席まで30分ほど待つという繁盛ぶりであった。

福岡県嘉穂郡桂川町で農業を営む古野隆雄氏。同氏は、「一鳥万宝いちちようばんぼうあいがも農法が切り開く楽しい稲作栽培の世界」と謳い、水田の中で合鴨を飼いながら(草や虫を食べて糞をすることにより有機物を供給し、泳ぎながら泥をかき混ぜ、口ばしや足で稲の株元を刺激することで生長が促進される。)、アゾラ(シダ植物のアカウキクサで合鴨の餌となる。)とドジョウと一緒に育て水稲を栽培する“アゾラ魚合鴨水稲同時作(略して合鴨農法)”を実践する日本における先駆者として知られる。つまり合鴨農法とは、水田で稲作と畜産と水産を同時に行うのである。田圃と裏山を所有し、20数年間完全無農薬有機農業を貫き、その営農スタイルは水稲・輪作で野菜及び大豆麦穀類・果樹・菌茸栽培、鶏卵、養蜂、農産加工(味噌、もろみ、漬物)、合鴨ヒナ孵化など多岐にわたり、いわゆる家族総出で楽しく有畜複合農業を行いながら、消費者と直接顔を合わせながらの取引を行っている。専業農家に育った古野氏は、雑草と格闘した10年間の後、水田稲作における合鴨農法に取り組んで以来、アジアの国々の農村を訪ね歩き、合鴨を通して農民との交流をはかりながら合鴨農法のみならず多くの事を学んできたという。現在も、国内外を問わず声がかかると二つ返事で御夫婦一緒に飛び回るほか、訪問・見学・研修を随時受け入れるなど多忙な毎日である。同氏の軽トラには「自然と人間が調和する社会を」という標語が掲げられているが、ここに古野氏の思いが表れている。

我々が、本当に心豊かな暮らしをしていくためにはどのような生活のスタイルが望ましいかは、グローバルスタンダードを謳う貨幣経済社会を基盤とする米国や日本のみならず、世界の国々での人やモノが密集した殺伐とした都市部や農村が荒廃する姿といった現況を見れば自ずから答えは出ている。これからの農業においても、換金作物を大面積栽培するといった貨幣経済にのせたビジネスと考える単一作物生産大規模機械化農業ではなく、家族皆で米・麦穀類や野菜を作り、家畜を飼うといった自給ベースの小規模家族農業も一つの選択肢ではないか。それは、世界中のそれぞれの国に共通する農的生活のスタイルで、日本でも伝統的農業が行われていた昭和40年代までは当たり前に見ることができた農村の風景であり、それは原風景ともいわれる美しい日本の暮らしの姿であった。農を中心として、林産、水産、そして様々な手わざが加わることによって生活に本当に必要な物を必要なだけ生み出し、お互いに助け合いながら、物々交換によってものが循環していく伝統的な暮らしこそ、真に心豊かで健やかで楽しい暮らしの姿ではないだろうか。国際耕種としても、そのようなあるべき暮らしの姿を如何に現代社会と融和を図っていくのかを、積極的に検討していきたい。そして、山田の中からこそ再び生き活きとした息吹が芽生えるような社会であるようにと願う。



オーガニック製品ショップ「プランツ」



元気に泳ぎ回る合鴨



左: 合鴨農法区、右: 慣行農法区